

触手エロトラップダンジョンにようこそ！ふぁいなる

シーン1

プロローグ

ユリアーナ姫 「きゃっ！」

アンナ 「姫様っ？」

アンナ 「どうぞお手を。逃亡続きでお疲れでしょう」

ユリアーナ姫 「ありがとう私の騎士。助かりました」

アンナ 「ああ、指先が冷たく……もしや呪いの影響では」

アンナ 「くっ、卑怯な手でユリアを蝕むなど。あの大臣どもめ」

ユリアーナ姫 「隷属の首輪に弱体化の効果はありませんよ、アン？ これは単に、女性を奴隷化させるためのアイテムなのです。先ほどは躓きそうになりましたが、疲労無効の魔法のドレスのおかげであと」日ぐらいは歩き続けても大丈夫ですし」

アンナ 「な、なお悪いです！ あ、あやつめ、偉そうに革命だの粛正だのと語っておきながら、全く下劣極まりないっ」

ユリアーナ姫 「まあまあ落ち着いて。解呪の鏡さえあれば外れるのですから……、あ、建物が見えてきたわ♡」

アンナ 「お、大きい。あれが魔具の館でしょうか？ マジックアイテムが眠るという謎のダンジョン……」

ユリアーナ姫 「恐らくは。人の気配はしないのに、何故か完璧に手入れされていて……
伝承の通りです」

アンナ 「ならば、これより先は私独りで参ります。アンが鏡を持ち出しますから、姫様
は外でお待ちください」

ユリアーナ姫 「まあ、だめよアン。危険だわ」

アンナ 「姫様の御身の為です」

ユリアーナ姫 「……私は、戦いには向きません。けれど回復魔法なら少しは使えるわ」

ユリアーナ姫 「なにより、私の『真実の目』がなくてはアイテムの鑑定ができないで
しょう？」

アンナ 「真実の目……姫様の美しい瞳に映った存在は、その真意を読み取られてしまう。
確かに心強いお力ですが……」

ユリアーナ姫 「魔物のいる樹海より、アンの傍の方が安全です。それに一人だと不安な
のです」

アンナ 「……ふう、致し方ありませんね。では姫様、中では私から離れないように。1
年前の舞踏会のように、迷子になられては困りますからね」

ユリアーナ姫 「くすっ、子ども扱いなんてして。雰囲気が台無しじゃないですか」

アンナ 「はは、失礼。しかしアンが姫のおそばにいますから、ご安心を」

シーン2

女騎士と身代わり触手H

アンナ 「くッ、触手め！ 姫様に触れる者は、許さんッ！」

ユリアーナ姫 「まあ、触手モンスターとは想像してたよりは柔らかいですね。これでしたら、支援魔法は……」

ユリアーナ姫 「きゃ!？」

アンナ 「姫様いけません！ その甲冑は……せやあぁッ！」

ユリアーナ姫 「ふう、助かりました。こんな硬そうな鎧に擬態できるなんて面白いですね」

アンナ 「姫様、もう少し緊張感というものを持っていただけると。私としてもいつでもお守りできるとは限らないですよ」

ユリアーナ姫 「まあ、私の騎士が守ってくれているから安心してました。それに、この触手達……」

アンナ 「ともかく、鏡を探しましょう。また敵に見つかってしまう前に」

ユリアーナ姫 「そうね。けれど……」

アンナ 「ええ。このダンジョン、想像していた以上に豪勢です。あの大臣の邸宅よりも広い」

ユリアーナ姫 「柱も壁も頑丈な石造りで、調度品はみな一級。本当に、この椅子なんて王室にあっても……」

ユリアーナ姫 「きゃ!？」

ユリアーナ姫 「椅子が触手に!? 真実の目でも見破れない擬態なんて!？」

アンナ 「姫様!？」

ユリアーナ姫 「んっ、んうッ! どうしましょう……足や腕にヌルヌルが……ひゃっ」

アンナ 「ンッ、切れない……この不埒な触手め、ユリアを離せ! んううッ!」

ユリアーナ姫 「困りました。んっ、今迄の触手とは違ってとっても硬いみたいで、んあっ!？」

アンナ 「姫様を襲うぐらいなら代わりに私をつ……っく、触手にこんなこと言っても……」

ユリアーナ姫 「あら？」

アンナ 「触手の動きが……? よし、今なら!」

ユリアーナ姫 「切れませんね」

アンナ 「つくう、この卑怯な触手め……姫様を離せ! ああ、ぬるぬるしてつかむこともできない!？」

ユリアーナ姫 「それがですね、『真実の目』ですとこの触手さん、ええっと、アンを：…さすがに、それは…」

ユリアーナ姫 「んあっ、脇は敏感なので!? ひゃっ!?」

アンナ 「ああ、姫様!? さ、先っぽが姫様のドレスの内側に延びて…くうッ」

アンナ 「姫様の目で何かわかっているのだしたら、おっしゃってください。このアン、姫様を守るためなら、どんな危険も厭いません」

ユリアーナ姫 「しかし、さすがに…女の子に、ですね…」

アンナ 「は？」

ユリアーナ姫 「ええと、アンが身代わりになるのだしたらこの場では解放して下さいみたいですが…触手さんは」回は中出しして満足したいと…命の危険はないと思うのだけれど、んん!？」

アンナ 「アンは姫様の騎士で、この身が使えるのだしたら中出しの一回や二回なんともありません!」

ユリアーナ姫 「ええっと、アン。その中出しの意味というのは、えっちな行為で男女が交わってですね…」

アンナ 「な、な、な!？」

ユリアーナ姫 「ああ、顔が真っ赤……だからアンには早いと……」

アンナ 「くくつ、早くなどありません！ おい触手、相手は私だ！ この身を差し出してやるから姫様を離せ！」

ユリアーナ姫 「きゃあッ!？」

アンナ 「姫様!？」

アンナ 「ふう、無事で良かった……んむッ!? ぢゅるるッ!？」

ユリアーナ姫 「ああ、ユリアの忠心しつかりと見届けます。……あ、すごい、そんなおっきなもの……」

アンナ 「ぶはっ、なんだ、触手が口に……んはあッ!」

アンナ 「あ、あ、今度は鎧にっ……やめろ、脱がせるなッ……姫様が見ているのに!？」

ユリアーナ姫 「私はお城でその手の教育を受けていましたから……こういう時、なんと
いって言うといいのか分からないのですが……ふあいとーですアン」

ユリアーナ姫 「ああ、触手さんはアンのおっぱいを所望されています。パイズリ、という前戯の一つで、まずは生殖器を育てて欲しいそうです」

アンナ 「ばい、じゅり?」

アンナ 「ひゃあッ! あ、あ、やめッ! インナーを脱がさないでっ! 胸が見られるっ、やら……んひいッ!？」

ユリアーナ姫 「ああ、殿方の指のようにぐの大きなおっぱいを……」

アンナ 「い、いやだと言ったのに……しかし姫様に手を出されるよりはマシ……いいだろう、貴様の醜い触手、を……ふんぬッ……この乳房の谷間で……挟み込んで、くれる……あう、すごい匂いっ!？」

ユリアーナ姫 「……前々から大きいとは思っていましたが……私の騎士ったら……ずるい」

アンナ 「はっ、ふんッ！ 何かおっしやいましたか、姫様っ」

ユリアーナ姫 「い、いえっ♡ そうですね、お城の先生にはパイズリの作法としては動きに工夫を。殿方の生殖器、おちんちん様は大切には気持ちよくなってくれるようご奉仕して差し上げると教わりました」

ユリアーナ姫 「今から自分の処女を奪う相手なのだと、じいっと見つめながら尽くすのが礼儀です。……この雄々しい子が、アンの初めてのお相手ですね」

アンナ 「ああ、あっ!？ ひ、姫様っ……おちんちんってそんな卑猥なことば、んあっ!？」

ユリアーナ姫 「こんなに真っ赤に。ああ、私の騎士、もしかして感じてますか？ 触手おちんちん様きもちいのです?」

アンナ 「あ、あ……き、聞かないで!？」

アンナ 「ひゃああ!？ 触手がっ……んひい!？ あ、あっ♡ やめ、乱暴にされてるのにな……ああっ、ああッ！ しぼるなあっ……乳房もげちゃう♡ はひっ、いっ、いい♡」

ユリアーナ姫 「ああ、アンの乳首あんなにぷっくりと、お胸をまたぐられる感触ってどう？ 触手さん、粘液でヌルヌルであんなに気持ちよさそうに、私も熱気に充てられてしまつて、ん……ああ、濃い、匂いが♡」

アンナ 「んはっ、ん、ん、こんなっ、まだ太くなるのかっ!? んううッ!? ひゃっ、先端を顔にちかづけりゅ!? んっぶ、粘液が鼻に!? 匂い付け、やあ!」

ユリアーナ姫 「先生に聞いた射精する時の男性器に似てる動き……そろそろ、触手さんの先っぽの穴から、子種、濃くて遅しいミルクがでるみたいです。ん、これが精液の匂いなんでしょうか、鼻に突く匂いですが……胸の奥でドキドキが止まりません」

アンナ 「はひっ、おかしい、なんでこんな!? んむっ!? 口に押し付けるな!? んぶっ!? ん、れりゅる……んおっ、うう、こんなまずいもののなのにつ!」

ユリアーナ姫 「はあ、はあっ、体中、口の中まで粘液まみれで見たこともないぐらいぐちゃぐちゃなのに、とってもきれいです……私、興奮して、ん♡」

アンナ 「っ、姫様……え、子種!? 射精!」

アンナ 「触手が!? 中でどくどく何か上ってきてる!? あ、あ、あっ、んびゅう!? んあ、何これ!? 白いのがいっぱい噴き出て!」

アンナ 「ンンンッ!? んえっ、ごくっ……レリュッ、ぷはっ……ああああ♡」

ユリアーナ姫 「こんなにいっぱい精液出ちゃうものなんですね。触手さんだからでしょうか？ ああ、アンもイかせてもらったのですね」

アンナ 「んあ、イいく？ ふあ、ああ…み、みないで!」

ユリアーナ姫 「んちゅ、あら、触手さんの体液、精液も、発情効果のある強い媚薬ですね」

アンナ 「ふえ!? 媚薬？」

ユリアーナ姫 「エッチな気分になるお薬です…まあ、今の状況には都合よいですし触手さんのご厚意かもしれませんので、次に…」

アンナ 「んあっ!? な、なぜ尻を持ち上げる？ このっ、触手の癖に…ひゃあんっ♡あ、脚が広げられてゆく…いやあっ!? こ、この格好は姫様に私のあそこが見えちゃう!」

ユリアーナ姫 「触手さんのおちんちん様、射精したのにこんなに遅しく…ああ、私の騎士、せめて私は見ていることしかできませんが、ちよっとうらやましいとは思ってませんから、がんばって、ご奉仕して下さいね」

アンナ 「ふうーっ、ふうーっ♡ 姫様が見てるのに、そんなおっきな…怖いのにドキドキが止まらない!? やあっ、せめて手加減…んにゃあッ!」

ユリアーナ姫 「んあ、私もちよっと、はしたないですが…ん、んあ」

アンナ 「姫、しゃま？ あふうん♡ おお、おしっこの穴など弄らないでくらひゃい、

んおっ……不浄れふ……」

ユリアーナ姫 「くすっ。おしっこの穴ではなくて、女性器、おまんこですね。アンが頑張ってるのですから、私も媚薬に負けないように自分を慰めない……触手さんに捧げてしまいそうです」

ユリアーナ姫 「大丈夫、アンナ・ベイエリンクは、ハーゼンバイン王国で最も勇敢な近衛騎士です。私の騎士が乙女の純潔をささげて守ってくれるといったのですから、きっと耐えてくれます」

アンナ 「え、ええっ!？」

ユリアーナ姫 「媚薬の様子だと、貫かれただけでとても言葉で表せないくらい達する、イってしてしまうかもしれないが……」

アンナ 「達ひゆる……!! んひゃ、にゆるにゆるに触られたところがあちゅく!! あ、ああ♡ んひいひい!! なにこれ!! おっきい気持ちいいのが私の中入ってきて!! 体びりびりに、あ、あ、ああ♡♡……!!」

ユリアーナ姫 「おへそのあたりまで入って……傷は破瓜だけです。おなかが触手の形にポッコリ膨れてるのに、そんな惚けた表情♡」

アンナ 「いくうつつ!? イっちゃいます!? だめ、姫様が見てるのに!？」

アンナ 「ああ、姫様、ひゅめしやま!？」

アンナ 「んっはああッ♡ おふんッ♡ んほっ、ほああああっ♡」

ユリアーナ姫 「はあ、はああつ……んあ、アンもこんな声、んふう、出すなんて……ん、んっ♡ 私も、自慰、オナニー止まらない♡」

アンナ 「何かきちゃう!? ああ、声、止まらない!? あ、あ、やら、気持ちい……んふううッ! オマンコイッ、いいッ、イふううううッ——ッ!!!」

アンナ 「こんな触手につ♡ 姫様の前で♡ あ、あ、ああ♡ あひやまの奥、真っ白……ああ、またっ、いくっ……姫しゃま、イきましゅ!? ああああつつ♡♡♡……!!!」

ユリアーナ姫 「とってもかわいいですよ。私の騎士。ああ、触手おちんちん様も先ほどのようにびくびくって、中に入れられるのはどういう感じなのでしょう? 気持ちいいです? 壊れてしまいそうなほど気持ちいいのですか?」

アンナ 「んひゃっ!? わからない、わからないです!? 体の中いっぱいっぱいなのに、頭の中まで触手のっ、おちんちんの感触でいっぱい! あ、あっ、おつきくっ……ふ、膨れ……ああ、さっきみたいにビクビク震えて!? はあっ、ああっ、出ていって……、ああっ、やめろ、もう入らな……あっひいいいッ♡ 入口すられてりゅううう♡♡♡……!!!」

アンナ 「んおおっ♡ おおんッ♡ オマ×コがめくれるっ、やら、やらあっ♡ 姫様の前で、こんな……あひいっ♡ 破廉恥な真似をさせないでえっ♡」

ユリアーナ姫 「アン、私の身代わりで守ってくれてるんですから、ん、大丈夫、アンはとってもきれいで、触手の粘液に濡れてとってもエッチで、私、ああ、指が止まりません♡」

アンナ 「姫様!? んあっ、そんなっ、負けっ、んおっ、媚薬のせいでッ……姫様、ひめ

しまあ!？」

ユリアーナ姫 「一緒に、アンも触手さんも一緒に、んんっ、いきましよう♡ 私、指だけで♡♡♡!!!!」

アンナ 「はい、アンも……んひいっ♡ はじゆかしい姿も、情けない声もおっ♡ 触手おちんちんでえっ…… あっふ、あうん♡ いい、イクっ、イクイクっ、イクウッ……!」

ユリアーナ姫 「なんてエッチな声…… 私も、はしたなくクリトリスの皮を、剥いへ……んあん♡ あ、あ、いちゆもよりゾクゾクしましゅ♡ アンの声を聞きながら！ 触手さんに見られてイちゃいますうっ♡♡♡!!!!」

アンナ 「もう、いきすぎてっ!? お漏らひしながらいきゅっ♡ 姫様に見られながら触手イカされまひゅうッ♡ 中、に精子、あ、あっ……んおおッ、おほおおおおッ——ッ!!!!」

ユリアーナ姫 「触手さんの射精、先ほどよりもいっぱい…… ああ、あんなにお腹膨れるのに幸せそうにイってるんですね。んあっ、私もお股水たまり出来るぐらい濡らして…… はあ、はあっ、アンもお汗沢山漏らしてとっても気持ちよさそう」

アンナ 「んああッ! おああッ! 出てりゅ、出てりゅうッ♡ さっきより熱い触手せーし、奥、に……んへああああッ♡」

ユリアーナ姫 「ひあっ、触手さん、クリトリスっ、私の自慰もッ、手伝ってくれるんです♡ んはあっ、私もまた達して♡♡♡!!!! ひあんんんっっ!!」

アンナ 「ああ、ひめしゃま!! んおっ、私も!? いや、そこ敏感なの!? イってるのに!? 射精とまりやない!? 気持ちいいのとまりやないのおおっっ♡♡♡!!!!」